

最優秀賞

伝えたいことがある

福岡県 筑紫丘高等学校二年 興梶 朝香

音楽は言葉を超える。私がこのことを信じていることができるようになったのは、高校二年生のこの夏、自分のすべてを吹奏楽に懸けたからだ。私たちの音楽が聴いている人に届くのか、以前の私はそれをちゃんと信じていることができなかつたと思う。言葉なしで、どうして私たちの思いが届くだろうか。でも、届けたい。伝えたいことがある。私は自分の伝えたいことが聴いている人に届くよう、自分の音楽を見つけたと思った。そうして私の高校二年生の夏は始まった。

私は中学のころから吹奏楽部に所属している。中学の部活の引退のとき、やり切ったと思えば後悔はなかった。しかし、吹奏楽が大好きで、他の部活が考えられなかった私は、高校でも吹奏楽部に入部した。担当している楽器はバスケットボールだ。吹奏楽に詳しくない人にはマイナーだが、バンドの中核となる大切な楽器だ。そして私はこのバスケットボールが本当に好きだ。トランペットのように大きな音は出ないし、フルートやクラリネットのように旋律が多くあるわけでもない。しかし優しく響きのある

音が得意なステキな楽器だと私は思っていて、そんなバスケットボールを吹けることを誇りに思っている。

そんな私がこの夏、自分のすべてを懸けたのが、年一度ある吹奏楽コンクールだ。全国の吹奏楽部員が憧れる、吹奏楽の甲子園とも呼ばれる全日本吹奏楽コンクールの予選で、ここ福岡県ではこの大会に進むために、それまでに支部大会、県大会、九州大会を突破しなければならぬ。また福岡は全国でも有数の激戦区であるといわれている。

人間が評価するわけだから、納得できる結果がでないかもしれない。スポーツと違い、明らかな点数で勝敗は決まらない。だからコンクールが好きではない人もいる。しかし、私はコンクールは嫌いではない。私たちの音楽を伝えられる機会だからだ。それも普段使うことができないう立派なホールで。だから私は毎年コンクールに感謝の気持ちを持って臨んでいる。

私たちがこの夏、懸けた自由曲は、「ラッキードラゴン」第五福竜丸の記憶」という曲だ。曲名からもわか

るように、第五福竜丸事件を題材にして作られた曲だ。第五福竜丸は一九五四年にビキニ環礁でアメリカの水爆実験に巻きこまれ、被爆した船のことである。地球を滅亡させられるほどの核など必要ない。そんな核の実験で命を落とした人がいる。人々に核の恐ろしさ、平和の尊さを伝えることができる曲だ。

私はこの曲を本当に全力で練習した。今の自分の技術で易々と吹きこなせる曲ではない。この曲で自分の思いを伝えられるよう、努力したと自信を持って言える。しかし、コンクールは一人で戦うわけではない。五十五人の演奏者、そして指揮者と同じ思いで演奏しなければいけない。しかも、たったの十二分で。私たちの今までを込め、伝えたいことを伝えるには、十二分間という時間はあまりにも短い。また、曲が始まると、声は出せない。スポーツでは試合が始まって声を出して応援することができる。選手はそれを励みに頑張れる。しかし、吹奏楽は違う。出せるのは、音だけだ。私たちは目に見えない音にすべてを懸けた。

迎えた本番。私は楽器ケースを開け、ずっと一緒に頑張ってきた私の相棒に、

「今日はよろしくね。頑張ろう。」

と声をかけた。時間はあっという間だ。すぐに私たちの出番になった。自分の席に座る。スポットが付き、まぶしい。指揮者である先生が私たち全員に笑顔を向ける。



そして指揮棒が下ろされた。

ここからは本当にあっという間だった。私たちのすべてがしまったラッキードラゴンがもう終わろうとする。まだ終わりたくない。終わらないで。まだ伝えたい。もっと伝えたい……。

指揮者が指揮棒を止めた。一瞬の静寂。指揮者の合図で素早く立ち上がる、と同時に私たちに送られた拍手。それを聞いて、私は伝えることができた、そう思った。ロビーに戻ると涙を流すお母さんたちや先輩方を見た。ああ、本当に伝わったんだ、と思い私の目にも涙があふれた。

目に見えない音にすべてを懸け、曲に自分の思いを乗せ、全力で演奏しきったあの瞬間。沸き上がる拍手。自分の音楽が、伝えたいことが届いた瞬間。これこそステージに立った者だけが味わえる最高の特権だ。そして私はやっぱり吹奏楽が大好きだと思いきらされる。この夏のあの感動を私は一生忘れない。